

枕草子

塩田良平

編

角川書店



日本古典鑑賞講座

第九卷

枕草子



昭和三十三年一月十日 初版發行
昭和四十年六月三十日 八版發行

定價五七〇圓

編者 塩田良平

發行者 角川源義

印刷者 中内あき子

發行所 株式會社 角川書店

東京都千代田區富士見町二ノ七
振替東京一九五二〇八
電話東京(265)七二二(大代表)

落丁・亂丁本はおとりかえいたします

枕 草 子

塩 田 良 平
編

角 川 書 店

解説

見るもの聞くもの 守まもり介け以上の娘ならば、たとえ宮仕えにいだしたてなくても、基礎教養として、「古今集」は讀んでいだろう。貫之の假名序の最初に、「世の中にある人ことわざしげきものなれば心に思ふことを見るもの聞くものにつけていひいだせるなり」とある。これを散文の方にもつてきたのが「枕草子」の奥書、「この冊子は目に見え心に思ふことを……つれづれなる里居のほどに書きあつめたる」である。見るもの聞くもの、眼に見え心に思うものを書きつけたくなるのは、筆を執る者の本能的な衝動だつたらう。ことに御簾みすだ深ふかくたれこめ几帳きようちやうの影にかくれ、顔を襟に引き入れて、あるかなきかの聲で發言することしかできない女には、自己表現の方法としては、目に見え心に思うことを、日記や隨筆の形でそぞろに書きつけるよりほかはなかつた。選ばれた人たちではあるが、彼女らがみずから思うことを書きつけるということは、女がせめて人間でありたいとする動きと見てもさしつかえなかつた。「かげろふの日記」が女性の男性に對する抗辯書として書かれたごとく、その作者道綱母につながりをもつこの「枕草子」の作者も、沈黙を強いられた女性にかわつて書いた社會的なうさはらしとつてよからう。

まくら まくらとは足に對する頭の方を言うのである。枕詞といえは頭につける詞である。北村季吟きたむらつきぎんは、「枕草紙といへる心は、この草紙にこととなる物めでたき物など枕詞を書きて、それぞれと書きつらねられたれば枕草紙といへるにや」と言つてゐる。上うへおきの詞、つまり冠かんむりづけのような形で書きつづけたから枕と言つたのだという説である。

まくら また歌枕の省略だともいわれる。歌枕は歌に詠まれた名所という意味である。「枕草子」の名は、この歌

枕を集めたものからきたという説がある。

女房物識り辭典 まくらのもう一つの意味は、枕もと、寝ているあたりということである。「枕草子」はそういう手近な物や事を書いたものだという説がある。この意味はさらに轉化して、身近、すなわち座右に置いて物ごとの典據とするものが枕だという説がある。「枕草子」は、女ことに女房が座右に置いて物ごとの典據とする本、すなわち女房物識り辭典という意味だというのである。「枕草子」は、初めは女房の教養として必要にせまられて書いたのかも知れない。そのうちに、ことわざ繁き世の中なので、あとからいろいろな雑文が入つてきて隨筆形態をとつてきたに違いない。

「枕草子」の意味 以上のように「枕」にはいろいろな意味があるが、だから枕の冊子といえ、そういう「枕」を書いたものだとするのも一應はまちがいはない。ところが、當時「枕草子」といわれていたものに二種類ある。「衣の棲重なりて打いだしたるはいろいろの錦を枕草紙まくらぐさに作りてうち着たらむやうなり」などと「榮華物語」にある「枕草子」がその一である。これは部厚ふこうい冊子をさすようであつて、内容には關係がない。

もう一つの「枕草子」の意味は、恵心僧都えしんそうずすなわち源信の著書に「枕雙紙」というごく薄い著書がある。なぜ枕といつたかという、その卷末に「甘露の門を知らんと慕ふ者は、之を以て晝は座して右に置き、夜は枕上に置きて之を思ひ之を觀ぜよ」とあることから、「枕雙紙」とつけた。この書は源信作ではないという説もあるが、後これを摸して恵心系統の僧侶、たとえば梶生流の阜覺の書いた「梶生枕雙紙」、また東陽坊忠尋の書いた「東陽枕雙紙」が出たくらいだから、「枕雙紙」という言葉自體は當時すでに僧家では有名であつたに違いない。この恵心僧都の「枕雙紙」は、佛法に關する大切な心得や知識の覺え書き、すなわち備忘録という意味になる。

以上のことから、當時「枕草子」といへば、部厚い冊子か備忘録かいずれかの意味をもつていたことがわかる。

そうなると、「枕草子」にはいろいろな作者が考えられるわけで、清少納言が書いた「枕草子」は、正確には「清少

納言枕草子」といわねなければならぬ。そうして、いつの間にかこの「枕草子」が有名になつて、他の「枕草子」が忘れられてしまつたとも考えられる。

そういうことを證明する一例として、中世時代にこの「枕草子」の内容と同じものの冊子の題に、「清少納言記」あるいは單に「清少納言」と書かれたものがある。つまり「枕草子」を普通名詞として略してしまつたのである。

枕にこそは ところが、「清少納言枕草子」は、この草子の奥書にある枕という言葉からとつたという説がある。つまり彼女が中宮から料紙をいただいた時、これに何を書いたらよからうか、主上の方は「史記」をお書きになつたのだが、と中宮が仰せられたので少納言は「枕にこそは侍らめ」とお答えした。それならばいただいたらよからう、といわれて賜つたということが奥書にあるのである。この「枕にこそは」の枕から「枕草子」の名が出たというのである。

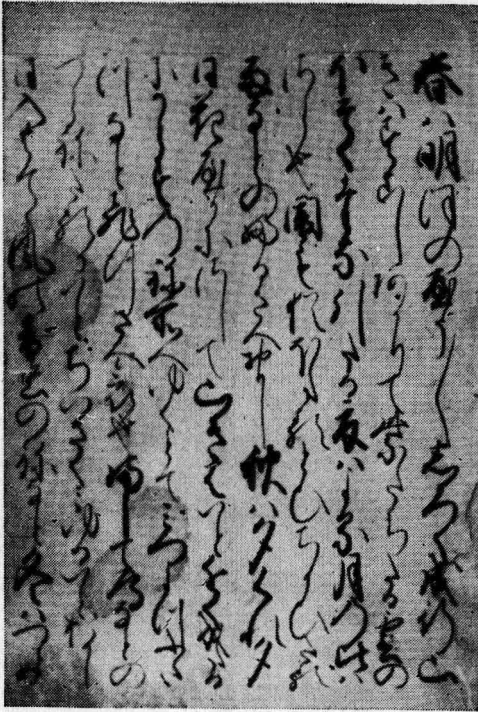
そこで、單に當時の常識の上から考えれば、この枕は前に述べたような意味の枕であり、また備忘録としてとつてよい。つまり「枕にこそは侍らめ」の意味は「枕ごとこそ侍らめ」「枕草子にこそ侍らめ」の省略と見てよいのである。

ところで、清少納言ほどの女が、この場合そんな常識的な意味でいうわけではない。「枕にこそは」は、何か當意即妙な洒落か、よほど宮を感心させた意味をもたなければ、並みいる女房の前でこんな高價な紙を「さば得よ」などと簡単に下さるわけではない、という説もある。そこで彼女のお得意の「文選」「文集」が飛び出してくる。

「文選」「文集」「古今集」と並んでこの二冊の漢籍は女房の虎の巻である。全部はもちろん讀んでいないだろうが、有名な詞句はそらんじていたろう。清少納言が特に喝采を博したのは、「白氏文集」で、「枕草子」だけでも「文集」を活用したところが十一カ所ある。そんな清少納言だから「枕にこそ」の枕はこういう古典からヒントを得たという説なのである。つまり「白頭老監書を枕にして眠る」という「文集」の文句か、「經を枕にして書を藉く」の「文

選」の文句をとつたという考え方である。もちろん主上が「史記」だから、こちらは「文選」「文集」でいきましよう、という氣持も働いたことも考えられる。

秀句^{すく} ところが、どうもこの説は少し廻りくどい。果して宮がびんと「文選」「文集」の句を思い當られたかどうか疑問である。そこでこれを少納言の秀句^{すく}ととる説もある。秀句は平安朝の趣味で、男も女も盛んに使つた洒落である。あつと言わせる句である。今でいう語呂合わせもあるが、單なる警句^{けいぐ}一般を言う。すなわち、「史記」を書いた



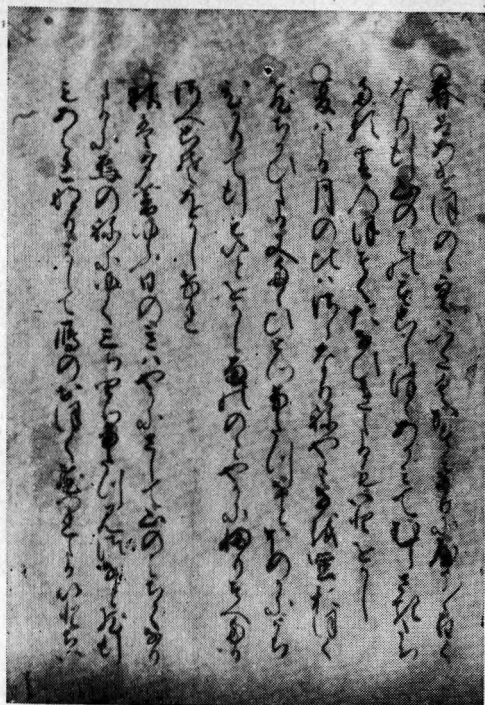
傳能因本枕草子

というから、この「史記」を踏^ふえて洒落のめしたので、「史記」だから敷^{しき}あるいは底に通じさせ、そちらが「しき」ならこちらは「まくら」でいきましよう、というわけである。そこで當時常用語となつていた「しきたへのまくら」に引つかけたという説である。田中重太郎氏などもその説である。また催馬樂^{くまがく}の底からとつたという原田清氏の説もある。催馬樂には「鴈枕」に「しきつきのぼる」などあるから、そんなこともひよつと頭に浮んだのかも知れない。

では作者は？ 學者の説というのは

説に賛成しておこう。

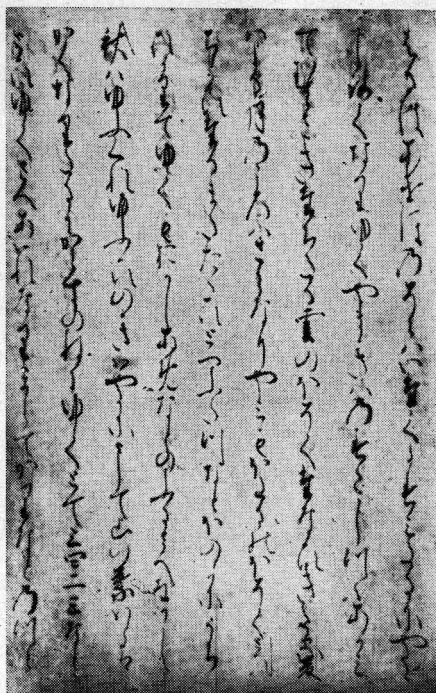
「枕草子」の成立と流布 女に必要な知識の事項は、清少納言が宮仕え前からメモぐらいとつていたのだろうが、長徳二年（九九六）ごろ、宮から判紙をいただいてからまじめあげたと見るが至當である。それを伊勢守が持ち出して流布したと奥書にある。しかしこの時の「枕草子」は、たぶん、前述の枕言を書いたものだろう。人事關係としては、せいぜい打聞程度のものであつたらう。物語形式でその人を匂わせるならばともかく、當時の貴族社會はうるさ



堀本枕草子

このようにいろいろあるが、要するにこうなると作者に聞かない限りはわからないであろう。ただ、私説を袂たもとませてもらえば、作者のつもりでは、「上様が史記ならばこちらにしましたへのまくらとゆきましよう」と洒落て、その枕は當時の常識的な意味の枕や「枕草子」を匂かほわせた、とりたいのである。（これはいずれあの世に行つて作者に確かめてはおくが。）

だから題名としての「枕草子」は案外作者がつけたかも知れないのだ。しかしここでは、通説としての跋文の枕からとつて後人がつけたという穩當な



前田家本枕草子

いから、現實の人間を描くにはよほど遠慮が必要だつたろう。現に今の「枕草子」でも作者は實に聰明に人間を見て筆つきを變えている。安全だと感じる人間はかなり辛辣しんらつにやつつけているが、これはと思う貴族は婉曲な筆の運び方をしてるのである。

だから最初の「枕草子」はかなり教養的倫理的な面が多かつたのではないかと思われる。従つてこういうものは比較的分類もしやすいし、今のようにな難的な形式ではなく、類纂的なものだつたに違いない。現存の「枕草子」

の中で堺本と稱するもの、前田家本と稱するものは整然たる分類がされて、自然現象に關するもの、情意生活に關するもの、記録的なものにはつきり分れているが、これは後人が分類したにはちがいないとしても、その分類の根據には初期「枕草子」の形態からヒントを得たという證據になるのである。

さて、こうして最初類纂的な「枕草子」が宮廷に流布して評判を得たのに力を得て、作者は隨想や記録や回想を書き綴つていった。これは、先に伊勢守に貸した初期「枕草子」が返却されてきて、それに書き足したものと考えられる。そして次第に、見るもの聞くものを秩序なく書きつけていたに違いない。だから初期の「枕草子」は、どちらか

というと、學問的であり知識の整理作業に屬するが、後期の「枕草子」は彼女の個性が動き出して獨創的な分野が多くなつたことが想像される。

「枕草子」は宮仕え中書きつがれていたものに違いないが、書いていた場所は作者の私邸である。特に回想記事は、中宮方が悲運になり女房としての勤務も暇になつてからが多かつたろうと思われる。最後の完成は皇后（前中宮）崩御後一、二年のことであつたろう。こうして成立した「枕草子」に近いものが、現存の三卷本「枕草子」である。それから後に、後人が多少わかりやすく手を入れ補色したものが、いわゆる流布本「枕草紙」である。これは近世から昭和の初期まで一般に流布していた本である。

「枕草子」は作者が存生中相當に流布したろう。紫式部なども、それを讀んでいたか、噂に聞いていたかしていたろう。しかし皇后崩御後作者の人の誤解か、あるいは皇后づき女房であつたための社會の關心の薄らぎか、あまり有名ではなかつたようである。少なくとも「源氏物語」には完全に壓倒された。

ものはづくし 「枕草子」の内容は大體五つに分類される。第一は自然鑑賞である。この中には平安朝的な自然の觀方に加うるに、作者の個性的見方も入つてゐる。いわゆる名詞的諸段ともいふべきで、山は、川は、木の花は、鳥は、蟲は、とか、彈くものは、降るものは、のとき連體止めを枕にした「ものはづくし」である。巻頭の「春は」もその一例。これらは、すべて文體は男性的な雄勁さで、しかも女性の感觸をもつており、形式は散文でも韻文的要素が非常に濃い。これにもつと思案のかげを宿したものが「徒然草」である。この情趣を韻文化したものが俳諧であり、この形式を機智にまで發展させたものが、いわゆる「なぞなぞづくし」である。

ものづくし 一般心理ないし作者の個人心理から歸納して、美意識や特定感情を呼びさます種々の對象を擧げたものが第二の分類である。すさまじきもの、にくきもの、にげなきもの、遠くて近きもの、のような形容詞を枕につけるので形容詞的諸段とする説もある。

隨想 隨筆としての「枕草子」の中心をなすもので、自由な氣持で自然と人事との交渉、あるいは人生の一斷面を書いたもので、その觀察や想像やそれらを通じてもらされる作者の人生觀などは、まったく少納言の獨創的なもので、ここには文學の生命たる類型破壊が生き生きとして行われている。色彩のとらえ方、音や匂の感じ方、ことに觸覺の鋭敏さ、官能的な描寫は紫式部以上である。情緒や思想においては彼女に譲るかも知れないが、現象に對する銳角的な切りこみ方は獨得なものである。そのかわり、作者はものを時間的系列、因果關係で見ることができず、瞬間的利那的印象をとらえることに主力をそそいでいる。生さきなく、野分のまたの日こそ、賀茂へまいるみち、などがその例である。

打聞 「今昔物語」や諸説話集なども打聞の一種であるが、女房の間でも古今の人物の美談や修養談を知ることが重要な教養であつた。従つてこれにはあまり獨自の見解はもらされないで、常識的な倫理を打ち出しているが、やはり枕言の一種に入れらるべきものであらう。しかしそういう説話でも、まとまつていてさすがに作者の構成力の巧みさが見られる。村上の前帝の御時に、社は（ものはづくしを書きかけて説話に轉じたもの）、業平中將のもとに、などがその一例である。

記録と同想 第五の分類は、作者の身邊記録である。日づけを記した日記的な記録もあり、漠然とした自己體驗もあり、回想風な自傳もあるが、根本は作者の實感による。「紫式部日記」のごとく、儀式の印象描寫もあるが、そこには必ず作者が大きく活躍していることが特徴である。いわゆるふきがたりのような自己宣傳もあるが、きわめてつましい自己反省の記録もある。作者の個性がもつとも赤裸々に出ている部分である。人物の觀察には誇張があつたり、早呑み込みがあつたり、必ずしもそこに全圓的な人間鑑賞はなされてはいないが、出入する人物は、いずれも彼女なりの角度から照射して、きわめてはつきりと浮き出されている。特に中宮定子（皇后）は完全に美化され、理想化され、この段の中心人物としてかがやかしい地位を占めている。筆者が、かつて「枕草子」は中宮の讃歌であると

言つたのもこの意味である。作者が仕えるに足る人物として、全面的に中宮に身をゆだねているということは、この段の隨所に知ることができるのである。

しかし、この自傳的部分が作者の全部であるとは思えない。これが率直な生活記録であるにかかわらず、ここに主として打ち出されているのは、作者の「をかし」で統一する人生の見方である。作者は中宮や、ひいては自身の生活をおびやかすかも知れない政治的社會的變動を目撃しながら、そういうことには一向觸れようとしないうところがある。もつとも、そこに作者清少納言の文學觀があるのかも知れないが、また一方そこにももの足りなさもあるのである。「あはれ」を知らないはずはない作者が、なぜ「あはれ」をさけているのであろうか。これは文學者としては一つの形式をなすが、作者としては確かにある謎である。(別項「清少納言物語」は、「枕草子」にわざと書きもたらされている清少納言の一面を追求しようとしたものである。)

清少納言 父は「後撰集」撰者、梨壺五人の一人清原元輔である。周防守から肥後守に轉じて任地で卒した。八十歳。少納言は正暦四年(九九三) たぶん二十八歳ごろ中宮定子に仕えた。元輔が歌人であつたので公卿と知人が多く、その女の名は宮仕え以前からすでに有名であつたらしい。元輔存命中、橘則光と結婚したか、あるいは通わせたか、いづれかで、一子則長を生んだ。宮仕えは父元輔の死後三年目であるが、そのころいつたん則光と切れていたらしい、清少納言のよび名は、清原氏の姓をとり少納言は今のところ不明である。兄に少納言在官者がいたのかも不明。宮からつけていただいたという説もある。宮仕えは長保二年(一〇〇〇)中宮改め皇后が崩御するまで續いた。その間、時々退出して里住まいをした。宮廷では才女の名をほしいままにし、頭中將齊信、頭辨行成、參議俊賢、同公任、左中將經房、右中將宣方、權中將成信などに愛せられ、特に中宮の父關白道隆、兄内大臣伊周には目をかけられた。なお左大臣道長にも好意をもたれた形跡がある。

當時中宮付きの女房としては、上臈女房に中納言、宰相の君、中臈には大輔の命婦、辨内侍などがいた。清少納言

は中蔵の下に屬する女房である。同輩に源少納言右京、式部、小左近、小兵衛などがいた。これらの人のだれと仲が悪かつたかわからないが、とにかく彼女への風當りは強かつたようである。主上付きの女房には右近内侍、少納言の命婦などがいたが、以上の中で特に才女と呼ばれたのは宰相の君と右近内侍であつた。皇后崩御後その妹君、淑景舎君や御匣殿に仕えたらしいがはつきりしない。それも正式の女房としてではなかつたらしい。御所退出後、攝津守藤原棟世（業カ）と結婚して攝津に下り一兒を生んだが、まもなく離婚し京に歸り、元輔の舊邸があつた桂か月輪に住んだ。死んだのは後一條天皇萬壽年間六十歳前後ではないか、といわれるが推定の域を出ない。

著書 清少納言には「枕草子」以外家集に「清少納言集」がある。そのほか「後拾遺」「詞花」「千載」「續後撰」「續古今」「玉葉」「續千載」等の歌集にとられている。別に「松島日記」と稱するものがあるが偽書である。

「清少納言集」は三十首ばかりの小歌集であつて、彼女の歌反古から作られたものだといふ説がある。「枕草子」と重複しているものはわずか三首である。中將成信との連歌などは詞書の方が長くて一種の説話形態をなしている。この家集で出て来る人名は、道長北方、實方、右京命婦、中將成信、右京兵衛などで、多くは單に「人」とだけ記してある。同一人ではなく、それぞれ異人である。左に四、五首挙げておく。

賤のやのしたたく煙難面て絶ざりけるも何によりぞも（「實方朝臣集」）

心かはりたる男にいひつかはしける

忘らるる身はことわりと知りながら思ひあえぬは泪なりけり（「詞花集」卷八）

人を恨みてさらにものいはじと誓ひて後に遣はしける

われながらわが心をも知らずして又あひみじと誓ひける哉（「續後撰集」卷十三、「清少納言集」には「いひてける哉」とあり）

水無月の頃萩の下葉に書きて人のもとに遣はしける

これを見よ上はつれなき夏草も下はかくこそ思ひ亂るれ（「續千載集」卷十一）

月を見て

月見れば老ぬる身社かなしけれつひには山の端にやかくれむ（「玉葉集」卷十八）

老の後籠りてゐ侍りけるを人の尋ねてまうできたりければ

とふ人にありとはえこそ云ひいでね我やは我れと驚かれつつ（「續千載集」雜）

交友 清少納言と交際した女流作家としては、和泉式部、赤染衛門があり、それぞれの家集に清少納言への贈歌がある。後者の「榮華物語」には、こんな描寫がある。

清少納言など出であひて少々の若き人などにも勝りてをかしう誇りかなる氣はひを捨てがたく覺えて二三人づつつれてぞ常に參る（鳥邊野）

これを見ても、とにかく相當に氣位の高かつたことは事實らしい。紫式部との關係はわからないが、式部の方では知つていたか噂に聞いていたろう。「紫式部日記」に、

清少納言こそ、したりがほにいみじう侍りける人。然ばかり賢しだち、眞字書き散らして侍る程も、能く見ぬれば未だいとたへぬ事多かり（以下略）

とあるが、酷評である。この文は説もあるが、とにかく式部がまるで目の仇にしているような書きざまであることが知られる。少納言が誤解されやすい人柄であつたことは事實だろう。

（塩田良平）

目次

解説

塩田良平

見るもの聞くもの(三) まくら(三) 女房物語り辭典(四)
「枕草子」の意味(四) 枕にこそは(五) 「文選」「文集」
(五) 秀句(五) では作者は？(五) 「枕草子」の成立と
流布(五) ものはつくし(六) ものづくし(六) 随想(六)
打聞(六) 記録と回想(六) 清少納言(二) 著書(三)
交友(三)

清少納言物語

塩田良平

一 父のこと

晩年の子(三) 和歌の名門清原家(三) 時流を泳ぐ元輔(三)

二 若き思い出

哀れな海女の記憶(三) めでたき貴公子(三)

三 橋則光

則光という男(三) 則光から離れゆく心(六)

四 君寵

召されて女房に(二九) 才女素描(三〇) 几帳を隔てた臨口
(三一) 無上の愛(三三)

五 大納言とのこと

眼のあたりみる夢(三三) 月下の逍遙(三三)

六 殿上のつれづれ

話題の女(三三) 嫉妬と誤解(三三) 唐詩クイズ(三六)

七 我は定すぎ古々し

別離の悲しみ(四〇) 冷静な戀心(四三) 戀のあらそい(四四)
御簾にうつる貴公子(四三)

八 枕草子

障にうちひしがれて(四六) 物語り辭典(四六) 心の秘密
(四九) 見つけられた草子(五〇)

九 二つの世界

里居(五三) 綾をもとす則光(五三) 昆布の紙包み(五五)
いきまぐ則光(五五)

十 花散りぬ

心通うすね者同志(六六) 返歌の抗議(六七) あけて待つ逢
坂の關(六七) 素顔の仲(六八) 則光との終止符(六八) 刺
戟を求めて(六八) 雪山のこと(六八) パスした附句(六八)
定子崩御(六八) 定子の思い出(六八) 靜かな里住み(六八)

元

三

三

四

四

三

六